校長室より　　第５２号

「天空高き」

平成２５年１０月３０日

西京銀行阿武会長講演ー学と辛、志をー

今月の１１日に西京銀行の阿武会長の講演会がありました。

演題は「一生懸命を超える本気」で、自身の体験談を通して、充実した人生を歩む指針として「学と、志」の言葉を生徒に贈りました。

まず、「学」ですが、人生を通して常に学び続ける姿勢の大切さを。

次に、「辛抱」と「志」の高さを、初代総理大臣となった光市出身の伊藤博文を例に挙げて熱く語られました。

また、本気の定義を「どれだけ知恵をしぼり、どれだけ準備して、どれだけ機会をつくり、どれだけ継続（徹した）したか」だ、と強調されました。

時にユーモアを交え、９０分講演されました。

人間は肉体のみで生きるのではなく、心で生きるのだ。

その少女の足に突然の激痛が走ったのは三歳の冬である。病院での診断は突発性脱疽（だっそ）。肉が焼け骨が腐る難病で、切断しないと命が危ないという。診断通りだった。それから間もなく、少女の左手が五本の指をつけたまま、手首からボロッともげ落ちた。

悲嘆の底で両親は手術を決意する。少女は両腕を肘（ひじ）の関節から、両足を膝の関節から切り落とされた。少女は達磨（だるま）娘と言われるようになった。

少女七歳の時に父が死亡。そして九歳になった頃、それまで少女を舐（な）めるように可愛がっていた母が一変する。猛烈な訓練を始めるのだ。

手足のない少女に着物を与え、「ほどいてみよ」「鋏（はさみ）の使い方を考えよ」「針に糸を通してみよ」。できないとご飯を食べさせてもらえない。

一冊の本が人生を変えることがある。そういう本に巡り合えた人は幸せである。

少女は必死だった。小刀を口にくわえて鉛筆を削る。口で字を書く。歯と唇を動かして肘から先がない腕に挟（はさ）んだ針に糸を通す。その糸を舌でクルッと回し玉結びにする。文字通りの血が滲（にじ）む努力。それができるようになったのは十二歳の終わり頃だった。
ある時、近所の幼友達に人形の着物を縫ってやった。その着物は唾（つば）でベトベトだった。それでも幼友達は大喜びだったが、その母親は「汚い」と川に放り捨てた。
それを聞いた少女は、「いつかは濡（ぬ）れていない着物を縫ってみせる」と奮い立った。少女が濡れていない単衣（ひとえぎぬ）一枚を仕立て上げたのは、十五歳の時だった。※単衣：裏地のない和服
この一念が、その後の少女の人生を拓（ひら）く基になったのである。

その人の名は中村久子。後年、彼女はこう述べている。

「両手両足を切り落とされたこの体こそが、人間としてどう生きるかを教えてくれた最高最大の先生であった」

そしてこう断言する。

「人の命とはつくづく不思議なもの。確かなことは自分で生きているのではない。生かされているのだと言うことです。どんなところにも必ず生かされていく道がある。すなわち、『人生に絶望なし。いかなる人生にも決して絶望はないのだ』」

出典「小さな修養論」藤原秀昭

受験は団体戦です。

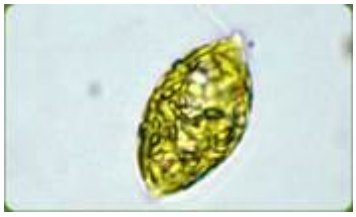
日に日に秋の色が濃くなってゆきます。
いつものように、8 時 15 分を過ぎるとパタリと登校する生徒の姿が消えます。踵（きびす）を返し背中に太陽の光を浴びて、校舎の方に向かいます。正門を通り、楽学の碑の前を過ぎると、学校の全景が目に飛び込んできます。グラウンド北側のメタセコイアの並木道の木々も色付いて来ました。白亜の第一校舎が秋の青空に一段と映えて見えます。私の好きな学園の秋の景色の一つです。
日本という国は、四季の移り変わりがはっきりしていて、豊かな自然に囲まれています。
「古事記」に倭建命（やまとたけるのみこと）の望郷の歌というのがあります。

倭（やまと）は　国の真秀（まほ）ろば
たたなづく　青垣（あをかき）
山籠（やまごも）れる　倭し美（うるは）し

「まほろば」は素晴らしく秀でたところ、「たたなづく」は幾重にも重なっている、の意味です。
「山々が青い垣根もように重なっている。その山に囲まれた大和は本当に美しい」と倭建命は言っています。

受験を控えた３年生にとっては、これからが正念場です。しかし、そんな精神的に追い込まれる厳しい時期だからこそ、「しんどい、大変だ」なんて思わずに、朝、登校する時や放課後下校する折りに、ぜひ、通学路や校庭の草花の様子、雲の動きなどに目を向ける余裕を持って下さい。
日本の四季の味わいを楽しみ、皆さんの心を豊かにしてもらいたいと思います。そんな心の余裕を持つことができれば、きっと他人に対しても余裕を持って、優しく接することができるようになります。受験は団体戦ですよ。

ミドリムシが世界を救う？



大きさ：0.05mm の小さな小さな生き物です。
カミの毛の太さがおよそ 0.07mm なので、
それよりも小さい。
誕　生：5 億年以上前に原始の地球で誕生。
発見者：オランダのレーウェンフックが、自作の
簡易顕微鏡で 1660 年代に発見。
学　名：ユーグレナ。ラテン語で美しい（eu）眼（glena）という意味。
和　名：「ミドリムシ」。「ムシ」ではなくワカメやコンブと同じ「藻」の仲間。
特　徴：動物でも植物でもある不思議な生き物で、淡水で育ちます。
※鞭毛（べんもう）を持っているので移動ができ、葉緑体により光合成を行って栄養分を体内に蓄えることができるので、 動物と植物の両方の性質を備えています。

実は、この小さな体には、無限の可能性が秘められているのです。

（１）地球温暖化の防止
ミドリムシの栄養素の生産効率はなんと稲の約 80 倍です。高濃度（大気中の約 1000 倍）の二酸化炭素の中でも、二酸化炭素を固定して炭水化物と酸素をつくり出す光合成能力が高いので、地球温暖化対策への利用が期待されています。

（２）未来の食料
ミドリムシは、ビタミン、ミネラル、アミノ酸、不飽和脂肪酸など、実に 59

種類もの栄養素を備えています。人間が生きていくために必要な栄養素の大半を、ミドリムシは含んでいるといっても過言ではありません。このような高い栄養価を誇るミドリムシは、先進国の人々にとっては日々の食生活で足りない栄養を補う栄養補助食品やサプリメントとして、また、発展途上国などで微量栄養素の不足に苦しんでいる人々にとっては食料援助の素材として大きな手助けとなりうる可能性を持っています。

（3）エネルギーをつくることもできる

ミドリムシは、光合成のときに油脂分を作り出しており、これがバイオ燃料の元として利用されています。バイオ燃料は、石油などの化石燃料と違って資源が枯渇する心配がありません。特にミドリムシから抽出・精製されたオイルは、軽質であるため、他の微細藻類に比べてもジェット燃料に適しています。

周辺道をクリーン

愛宕社協と高水中 計100人で合同作戦

高水高校付属中学校（前田茂雄校長）と愛宕地区社会福祉協議会（岩尾哲弥会長）は19日、「合同クリーン作戦」と銘打ち、同校近辺の道路とJR南岩国駅周辺のごみを拾い、雑草を取り除く清掃奉仕に汗を流した。

作戦は、環境美化を通じて生徒と住民が交流を図る……

歩道に生えた雑草を取り除く作業に励む参加者

ことが目的。昨年に次いで2回目。

中学1～3年の有志と教職員ら約50人、地区社協役員や岩国交通安全協会愛宕分会のメンバー約35人のほか、岩国署の署員も参加した。

参加者は4班に分かれて国道188号の上下線、南岩国駅周辺、愛宕町に移転開業した国立病院機構岩国医療センターに至る県道沿いを分担した。

ごみ袋を片手に移動しながら歩道や路肩などに落ちたたばこの吸い殻や空き缶、紙くずなどを収拾した。

2年生の坂田大夢君(13)は「こんなところにと思う場所にも吸い殻が捨ててあった」と喫煙者のマナーの悪さに閉口していた。

日刊「いわくに」より